

国際鼻科学会議'91

(ICR' 91; International Congress of Rhinology)

(1991年9月、京王プラザホテル、東京)

国際鼻科学会議'91に関する下記の内容は、日本耳鼻咽喉科学会会報 94 巻 1945—1946 頁の第 30 回日本鼻科学会の報告（東京女子医科大学 石井 哲夫会長）より抜粋させていただき一部変更させていただきましたこととお断りします。

国際鼻科学会議'91は (International Congress of Rhinology) は、3つの主催団体で組織され、1991年9月23日から28日までの6日間にわたり東京都新宿区の京王プラザホテルで盛大に開催された。国際鼻科学会 (International Rhinologic Society, IRS) は高橋 良慈恵医科大学名誉教授を会長 (President elect) として、第10回 ISIAN (10th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose) は馬場駿吉名古屋市立大学教授を会長 (President) として、第30回日本鼻科学会 (Japan Rhinologic Society, JRS) は東京女子医科大学石井哲夫教授を会長として、共同開催された。これらの3つの主催団体を統合し、IRSの事務総長 (General Secretary) として企画運営の全責任を執られたのが奥田 稔日本医科大学教授であった。奥田教授は1985年から1991年8月まで日本鼻科学会の理事長であり、日本鼻科学会も会員の総意の下に最も重要な事業の一環として、国際鼻科学会議'91を支援したのである。9月23日に開会式が行われ、ゲストとして三笠宮寛仁親王殿下のご臨席を賜り、英語で祝辞を頂戴した。次いで、3つの Welcome lecture が、超分解能電子顕微鏡、細菌の耐性、医学の未来について語られ、そのあと reception に入った。第30回日本鼻科学会は27日、28日の両日に日本語の発表、討議で運営されており、26日が一日中シンポジウムで英語の講演であるが、同時通訳を採用し、日本鼻科学会のみ参加者も聴講可能とした。国際鼻科学会議'91は第30回日本鼻科学会を取り込んだ形となったので、演者が同じ内容の演題を英語と日本語と別々に出すことはできなかった。従って、多くの日本鼻科学会会員は英語で国際セッションに演題を提出し発表することになり、日本語での自由演題は例年に比べ少なかった。このため第30回日本鼻科学会のことを述べようとすると、どうしても国際鼻科学会で発表した日本人会員にも触れなくてはならない。24日、25日は英語のセッションで自由演題158題を3会場で、午後4時からの10の小部屋に分かれて、Fireside conference が開かれた。26日のシンポジウムは2会場で8テーマであった。粘膜の免疫能、副鼻腔疾患、鼻アレルギーの病態生理、画像診断、新薬、内視鏡手術、鼻腔通気度、顔面骨折などにつき、国際的レベルの高いスピーカーによって講演され、英語が苦手でも同時通訳され、その大要を知ることができるように準備されていた。第30回日本鼻科学会にのみ登録参加することも可能でこの場合は26日のシンポジウム、27日、28日の日本語でのセッションに参加できるようになっていた。日本語セッションは、

27日2会場、28日1会場で行われ、自由演題75題とパネル(5題)、指名演題(5題)が発表された。自由演題はアレルギーの基礎、臨床をはじめ、副鼻腔炎、嚢胞疾患、鼻腔通気度、組織、手術治療、良性・悪性腫瘍、嗅覚、ビデオ演題などであった。このほかパネルディスカッションとして、長谷川 誠、市村 恵一両先生による「鼻粘膜における自律神経の生理的役割—血管系を中心に—」が発表され、皮膚寒冷刺激と鼻腔通気度、血流量や冷気吸入における鼻粘膜の反応などが報告された。荒牧 元先生の司会で臨床面で鼻科学診療のトピックスが企画され、慢性副鼻腔炎に対する上顎洞チュービング、小児副鼻腔炎の上顎洞穿刺洗浄法、非特異抗原 MS-antigen による花粉症の治療、レーザー手術、フィブリン接着剤の鼻科領域への応用などが報告された。鼻腔通気度の測定法の点では、acoustic rhinometry が国際的にも研究が盛んになっており、従来の通気度測定法に一石を投じる形となった。このほか、基礎的演題では従来の組織学、電子顕微鏡、組織細胞科学的手法に加えて免疫組織化学の手法が活用され、生理機能の解明に大きく寄与していることがわかった。さて、参加人数であるが、日本も含め34カ国からの参加があった。ICRへの海外からの登録は219名、同伴者が58名であり、韓国45名、デンマーク20名、ドイツ20名、米国19名、スウェーデン18名などであった。ICRへの日本人の登録者数は248名、同伴者5名であった。従って、ICRは登録者は計467名、同伴者63名で計530名であった。第30回日本鼻科学会のみ登録者はすべて日本人で360名であった。ICRと合わせると日本人は608名になり例年の日本鼻科学会の参加者とすればまずまずの人数であったろう。このように第30回日本鼻科学会は国際鼻科学会議ICR'91とjoint meetingの形で行われたが、事務総長奥田 稔教授のたゆみないご努力とリーダーシップに加えて3会長の共同作業により円滑に運営され大成功をおさめた。このタイプの企画の良い手本となることは確実である。また日本鼻科学会会員全員のご協力も併せて感謝したい。